

活彩!保健大学だより

AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

第11号/平成16年12月24日発行 青森県立保健大学広報誌



第2回青森県立保健大学学術研究集会



大学祭



海外授業



体育祭

CONTENTS

第2回青森県立保健大学学術研究集会……………	2	就職活動状況、卒業生との懇談会……………	16
学生活動：大学祭、体育祭、募金活動、		卒業生から……………	17
サークル活動……………	4	研究活動の紹介……………	18
海外授業：イギリス……………	8	健康科学教育センター活動……………	19
国際交流：日韓学生交換交流事業、海外からの		全国学会……………	20
研修生……………	9	特別講義……………	21
食事アンケートについて……………	10	公開講座、出張講義……………	22
金曜料理教室、保健室から……………	11	事務局から……………	23
大学院(博士・修士課程)について……………	12	人事異動・編集後記……………	24
退官によせて……………	14		

第2回青森県立保健大学学術研究集会の報告

健康科学研究センター長
嵯峨井 勝

1. 学術研究集会に至る経緯

去る9月17日(金)、本学において、「第2回青森県立保健大学学術研究集会」が開催されました。昨年までは、大学の研究集会と県健康福祉部の「健康福祉職員研究発表会」とは別々に催されてきましたが、近年の経費節減、本県の保健・医療・福祉のさらなる向上を目指して、大学と健康福祉部が共同してその任に当たることが合意され、本学で学術集会が合計150名の参加のもとで開催されました。

一方、2002年の人口動態統計では、青森県の平均寿命が男女共に全国最下位になってしまいました。そのため、2002年末から2003年初頭にかけて、この現状から脱することを目的に、健康福祉部と大学(健康科学研究センター)とが協議し、本学で官学連携研究として「健康寿命アップ・プロジェクト」を立ち上げるに至りました。

2. シンポジウム「青森県の健康寿命アップと保健大学の取り組み」

今回の研究集会では、上記の現状から脱却するための実践あるのみと考え、本学で始めた「健康寿命アップ・プロジェクト」を県内の専門職者に知っていただき、大学と自治体専門職者との共同・実践の輪を広げたいと考え、シンポジウム「青森県の健康寿命アップと保健大学の取り組み」を



写真1 シンポジウム「青森県の健康寿命アップと保健大学の取り組み」の討論風景

持ち、上記プロジェクトの5名の教員の報告と2名の追加討論を戴きました(写真1)。

初めに、「健康寿命にかかわるライフスタイルの要因研究」について佐藤秀紀教授が青森県と長野県を比較し、本県の食生活への関心が低いこと、喫煙率(図1)や飲酒率が高いことなどを報告しました。なお、この研究は11月9日(火)に青森市で開かれた「保健協力員代表者研修会」で沖縄県のデータも含めた結果が報告され、同日の東奥日報(朝刊)でも、平均寿命と生活習慣との間には深い関連があることが報道されています。

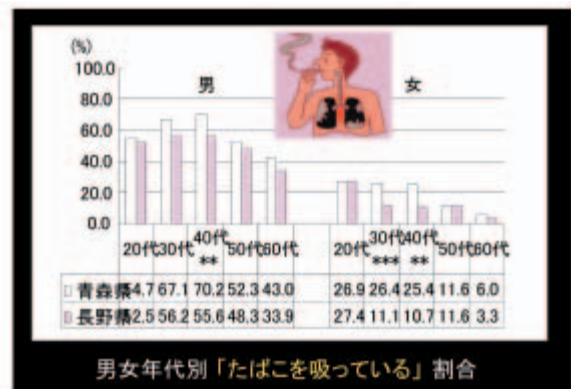


図1 青森県と長野県の男女別、年代別喫煙率の違い

2番目と3番目は「減塩研究班(竹森幸一教授)」と「食生活研究班(藤田修三教授)」のPBL(問題解決型学習)法を取り入れた地域保健活動が報告されました。特に竹森教授はPBL学習法の普及改良のパイオニアとしての報告をされ、藤田教授はこのPBL学習法を取り入れて、高コレステロール血漿者(220 mg/dl以上のヒト)を対象にコレステロール低下、血液サラサラ度や動脈硬化度の健康指標の改善に優れた結果が得られ、その背景には野菜摂取が増えた食生活の改善が認められたこと(図2)を報告しました。4番目には、「運動能力研究班」の山下弘二助教授が「食生活研究班」と共同で運動指導を行った後に期待に近い結果を得、今後も運動を継続してもらおう動機付けに工夫が必要であることを報告しました。

5番目は、嵯峨井勝教授が、住民健診データの

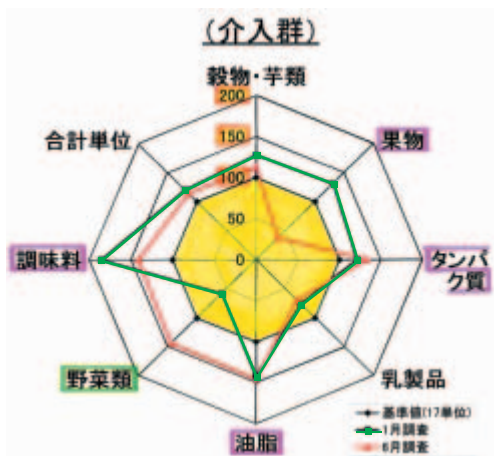


図2 PBL式健康教室参加者(介入群)の食事傾向の変化：最後の調査(6月、赤色線表示)では1月調査(緑色線)時より野菜摂取が増え、薄味に変化していた。

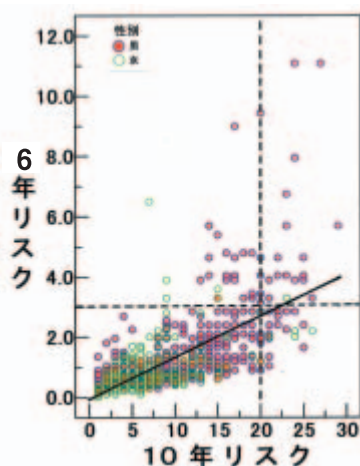


図3 青森県内住民健診受診者1500人の冠動脈疾患リスクの分布
10年あるいは6年以内に心筋梗塞発作かそれで死亡する危険率の分布

年齢、血圧、総コレステロール濃度、HDLコレステロール濃度、喫煙の有無、糖尿病の有無などから、今後10年あるいは6年以内に心筋梗塞で死亡するか発作を起こす危険率(図3)を計算できることを報告し、その危険性の高いヒト、特に男性を対象とした健康施策の必要性を強調しました。

その後、食生活研究班と共同して教室開催に尽力された上北町総括保健師・成田由美子さんに追加討論を戴き、大学との共同は保健活動の見直しやマンネリ化の打破の意味で有意義であったこと、大学はもっと地域に出向いて欲しい等の要望を述べられ、最後に、健康福祉部保健衛生課総括主幹の熊谷崇子さんから今後の県の健康増進施策として、禁煙、肥満解消、自殺予防等の活動を推進していくことが紹介された。



写真2 学術研究集会のポスターセッションでの研究成果の発表

3. 口述発表とポスター発表で37課題

さらに、本研究集会は、シンポジウムの他に2つの会場で口述発表24題とポスターセッションで13題の合計37課題の発表があり、また県内専門職者、本学の教員の他に大学院生の研究発表もあり、若いエネルギーを感じることができました。一般演題では、高齢者・痴呆高齢者の介護予防、ヘルスプロモーション、女性問題、食環境、食中毒、感染症、環境対策など広範にわたるテーマで、かつ青森県特有の問題を取り上げて報告して戴き大変有意義な研究集会となりました。

4. 今後への期待

今回の研究集会は、青森県の現場の問題点と解決方法などを参加者が共有し合う上で大変有意義で、この継続が県の保健・医療・福祉の向上と県民の福祉、健康増進にかならず結びつくものと確信することができました。本研究集会は、青森県のことは青森県で解決する為の必要な交流の場であるとの思いを強くしました。願わくは、もっと多くの方の参加を戴くことができたなら、と思います。研究集会の名前が大学のもののようになっていますが、今後は「青森県保健・医療・福祉・環境学術研究集会」のようにして、もっと多くの現場の専門職の方々が自分たちの研究会であるという意識を持って参加してもらえるように設定・運営することが必要と感じました。

がつんと青春☆汗まみれ ～だだだーんと大学祭～

大学祭実行委員長(社会福祉学科2年) 是川 幸恵

1. はじめに

第6回青森県立保健大学大学祭を何とか無事に終わることができ、今はホッとしています。けれども蓋を開けてみれば失敗や迷惑だらけで反省すべきことはたくさんあり、手放して喜べるものではないのかもしれませんが。何より実行委員会を組織するのが遅かったことは準備作業を慌たしくし、全体的に細かい気遣いの少ないものにしてしまったと思います。このことは深く反省し、次代の実行委員にはよりよい大学祭を目指してもらいたいと思います。それでも結果として成功したと思えるのは実行委員をはじめ、委員以外にも多くの学生が今年の大学祭も素晴らしいものにしようと準備作業に関わってくれ、当日まで頑張ってくれたからだと思います。また、諸先生方や事務局の方々、歴代実行委員の先輩方にいただいた励ましや助言が力添えとなり、私達を支えてくれたことに感謝したいと思います。

2. 大学祭を終えて

タイトルにもさせていただいたのですが、今年の大学祭は「がつんと青春☆汗まみれ～だだだーんと大学祭～」をテーマに開催されました。このテーマには友達同士、ぶつかり合うことが少なくなった現在(いま)だからこそ、この大学祭を機会にがつんとぶつかり合って青春を謳歌しようという私たち実行委員の思いが込められています。

当日のイベントは、両日開催のものとして、模擬店、縁日、ニュースポーツ、フリーマーケット、園児絵画展、健康測定、疑似体験コーナー、相談コーナー、大学紹介、3on3、ハンセン病パネル



大人気！模擬店

展、アートバルーン、宝探し、お化け屋敷、市内作業所による販売等が行われました。また、9日のみ開催となりましたが、初の試みとして隣接している老人福祉施設の入所者の方に協力をお願いし、本学学生と合同の演奏会、また手作り教室を企画しました。これはより地域に開かれた大学祭を目標にしたもので、快く協力して頂いたお陰で大成功に終わったと思います。その他にもEnglish cafe(9日のみ)、そして県内出身バンドである「マニ☆ラバ」のライブ(10日のみ)が開催されました。新旧織り交ぜた今年のイベントはきっと皆様楽しんでいただけたのではないのでしょうか。その他にもフォトサークルによる写真展、めいと(ボランティアサークル)による活動記録展示、スマイル(性について考えるサークル)によるカウンセリングルーム等、今年はたくさんのサークルが活動を報告する場として学祭を利用してくれたことは嬉しく思います。



縁日～ヨーヨー売り～

今年の広報活動は新しい試みの多いものでした。まず、今年は大学祭パンフレットを外注せずすべて手作りのものにしました。内容を必要最小限にし、足りない部分は立体的に案内することを試みました。それに合わせ、大学祭に協賛していただいた企業広告の方法を例年とは全く違うものにしました。その方法は東西門にのびる並木道を利用し、大学祭のイベント、模擬店の案内と共に広告するというものです。自分たちにとっても手探りで試みだったため、すんなり進まないこともありましたが、それでもたくさんの企業に協賛していただいたことには大変感謝しています。新しいことをするには時間が足りず、不手際があったり迷惑をかけてしまったりすることもありましたが、それでもこの試みが無駄にはならなかったのは、企業をまわり協賛をお願いしてくれた担当委員の頑張りがあったからだと思います。

今年は残念ながら天気にも恵まれず、予想外の台風には実行委員一同、とても頭を悩まされました。そのために急遽、屋外で予定していたものもすべ

て屋内での実施となり、特に模擬店出店者の学生の皆さんには迷惑をかけてしまい、大変申し訳なく思っています。すべて屋内で実施すると決断したのは当日の朝で、対応策もままならない実行委員の指示に従い、不手際を責めることなく協力していただいたことで何とか台風に対応できたと感謝しています。学生の皆さんの協力無しにはあれだけ短時間で予定を変更することは出来なかったと思います。また、広いスペースを提供出来なかったにも関わらず、あれだけ盛大なものとなったことも皆さんの頑張りのお陰だと思っています。

今年の中夜祭・後夜祭は例年以上に楽しいものになったのではないのでしょうか。安全と防犯の面から原則として本学学生のみでの参加となりましたが、それでもたくさんの学生の皆さんに参加していただき、楽しい夜となったと思います。中夜祭ではビンゴ大会やカラオケ大会、○×ゲームで盛り上がり、後夜祭では男女装コンテスト、学内バンドによるライブ、映像とダンスのショーで盛り上がりました。天気の関係で残念ながらキャンプファイヤーは中止となりましたが、それでも花火は予定通り打ち上げることができ、大学祭の良い締めくくりとなったと思います。あの花火の美しさはどんな立派な花火大会にも劣らないものだったでしょう。



喝采を浴びた津軽三味線サークルの生演奏

3. 実行委員を経験して

大学祭から学んだことはたくさんあります。今年は56人という多くの学生が実行委員に名乗りをあげたのですが、人数が多いだけにぶつかる問題も去年とはまた違うものでした。大学祭を成功させたい思いは皆一緒のはずなのに団結するのは容易ではなく、どこかバラバラなまま日々が過ぎていったような気がします。また一つ一つ動き出すのが遅く、様々な関係者に迷惑をかけてしまったことも大いに反省すべき点だと思います。けれども悪い点ばかりではなかったとも思います。1年生と2年生、またそれぞれの学科を越えて色々な

人と仲良くなれたことはとても良かったと思いますし、大学祭を運営していくことに対して友達同士ではなく委員同士として意見をぶつけ合ったこと、そして自分一人ではどうしようもない問題を誰かと一緒に頑張ることで解決出来る喜びを感じたり、何かに一生懸命になっている委員の姿を見ることで励まされたりしたことはとても貴重な体験だったと思います。来年の大学祭は現1年生が中心となるのですが、今年の反省点を生かし、新たな大学祭を創り上げて欲しいと思います。そのときには、私たちが先輩にさせていただいたように出来る限りの協力をしていきたいと思います。そしてより素晴らしい大学祭を創り上げ、この保健大学祭が盛大なものになればと願っています。

4. おわりに

この準備作業を通して、大学祭はたくさんの人の手によって創り上げられるものなのだと感じました。大学祭は実行委員だけではなく、本学学生、また諸先生方、事務局の方々だけでも成り立ちません。そのほかにも毎年お世話になっている業者の方々や学校・施設の皆様のご理解とご協力は想像以上の助けとなっているのです。このことはどんなに感謝しても足りないくらいです。もちろん、諸先生方や事務局の方々のお力添えには大変助けられました。お忙しい時間を割いて私たちの相談に乗り、助言し、協力していただいたことで私たちは最後まで頑張れたのだと思います。実行委員以外の学生の協力もとても嬉しかったです。学祭も間近に迫る頃には実行委員と一緒に夜遅くまで作業してくれ、本当に助けられました。当日、悪天候にも関わらずお越しいただいたたくさんの方々も大学祭を成功に導いてくれた一人だと思います。

準備作業に関わり頑張ってくれた方々から当日お越しいただき、楽しんでいただいた方々まですべての人に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。



手作りのアートバルーン

伝統を受け継いで

体育祭実行委員長(社会福祉学科3年) 湖東 里美

『今年は体育祭いつやるの?』

『体育祭は何の競技やるの? チーム分け今年はどうなるの?』

6月くらいから、学生から体育祭に関する様々な質問が私たち自治会役員に投げかけられました。体育祭とは、昨年度自治会の先輩達が作り上げた新たな保健大の行事です。しかし、私達自治会役員の中には昨年度と同じメンバーはいません。また体育祭の実行委員だったメンバーもいません。そのため、学生達の「体育祭をやりたい!!」という意見が多くても、一体どのように進めていけばいいのか分かりませんでした。チーム分けが一番良い方法は何か、どの種目をやればいいのか、時間配分はどうしたらいいのか、それらはまるで見当が付きません。

しかし、分からないということだけでは何も進まないで、自治会から学生の皆さんにどのような体育祭をやりたいのかアンケートをお願いしたので。そのアンケート結果や昨年度の話をもとに、自治会役員が体育祭実行委員会となり会議を繰り返し、当日の内容に関して決めました。アンケートにご協力いただき本当にありがとうございました。また、アンケートを回収してから体育祭の実施に時間がかかってしまったことについては、この場を借りてお詫び申し上げます。



応援風景

会議の結果、種目は、バスケットボール、バレーボール、ソフトボール、サッカー、ドッジボー

ルの5種目。男女分ける種目、分けない種目を決め時間配分を決めました。昨年度はなかったグラウンドでの球技を取り入れたことで当日の天気への心配があったので、雨の場合の種目や時間配分も考えました。それぞれの種目については、各サークルの代表の方に審判や責任者をお願いしました。チームについては、最初は学科別対抗と考えていましたが、参加者を募った結果人数にばらつきがあったため当日、くじを引いてもらい2つのチームに分かれてもらうことにしました。

いよいよ当日。天気は雨…。外の種目のない予定表もありましたが、参加者の皆さんは外での種目を楽しみにしているようで「外の種目に関しては泥だらけになってもかまわない」という声も多かったため、サークル代表と私達は話し合い、午前と午後の予定を反対にすることにしました。くじ引きにより、一緒に来た友達と別々のチームになってしまう学生も少なくなかったと思います。



サッカーの風景

またチームごとにそれぞれの種目に決まった人数を出さないといけなかったため、自分がやりたくない種目に出場せざるを得ない人もいたでしょう。しかし、最後の全員参加の体育館全面を使ったドッジボールでは、学年や学科の壁を超えたそれぞれのチームに一体感が生まれたように見えました。

今回の体育祭は、昨年度の先輩達が作り上げた体育祭と比べると未熟な点が多かったと思います。しかし、学長を始め各教員の方々、教務学生課の方々のご協力があり、大きな怪我をする学生もなく、無事成功することができました。本当にありがとうございました。また、体育祭に積極的に参加してくれた学生の皆さんにも心から感謝しています。来年度以降も、私達の体育祭の反省点を生かして是非継続してほしいと思います。

募金活動について

自治会長(社会福祉学科3年) 湖東 里美

今年、全国各地で大雨や台風、地震などの被害者が多いということは、皆さんご存知だと思います。その中の一つである夏の新潟・福井の大雨による大洪水で、本学の学生の実家が被害にあいました。そこで自治会役員の他、先輩、ボランティアサークル等多くの学生から「募金活動をしたい！」

という声があり、募金活動を始めました。売店の全面的な協力のもと集めたお金は、10月7日に本人に渡すことができました。学生の皆さん、教員の方々、本当にご協力ありがとうございました。また、被災地の復興をお祈りいたします。

●サークル紹介 ボランティアサークル「MAGONOTE」

代表：社会福祉学科4年 小川 まゆみ・大友 隆幸(顧問/杉山克己講師)

皆さんMAGONOTE(まごの手?)をご存知でしょうか。背中が痒い時に使う棒状で先端に猫の手のようなものがついているものです。そのまごの手をイメージし痒い所に手が届くような存在でありたいという気持ちからサークルが設立されました。現在の社会福祉制度で補いきれないこと(ニーズ)、例えば急を要するため公の機関に依頼する時間がない、負担金が多い、十分なサービス機関がない等の理由から日常生活に支障をきたしている方、またその家族に対して微力ながらお手伝いのできればと考えています。支援が必要な方はすべて対象者として、自分たちが出来る範囲の事は何でも取り組む姿勢で活動を続けています。内容は、冬期間は主に雪片付け、雪解け後は草むしり、知的障害者の方とのレクリエーション参加や障害者の方々のイベントの支援、当サークルで企画したイベント(お花見)などです。多くの方々と接する事により、地域住民の方々は何を必要としているのか、どうして欲しいのか、どのような活動を望んでいるのかを伺い知ることができたと思います。これらの学びを大切に今後も住民の一人として支援活動を続けていきたいと考えています。



雪片付け

●サークル紹介 「バンダニ・サークル」

代表：社会福祉学科2年 近江谷 素直(顧問/千葉たか子助教授)

私たち「バンダニ」は、地域開発や国際関係について理解を深めることを目的としたサークルです。「あおもりとベンガルをつなぐ会」というNGOの学生部として活動しています。

主な活動の一つが、学外での学習会です。これは、本学の学生以外に弘前大学の学生や一般の方も参加されています。毎回、さまざまなテーマについて意見を出し合い、交流を深めています。学習会といっても堅苦しいものではなく、ゲームやクイズなどを通して、楽しく学んでいます。この他に、青森市内の保育園に訪問し、インドの保育園との交流の仲介をしたり、世界の国の料理を実際に作ったりしています。

サークル名の「バンダニ」とはベンガル語で「輪」という意味のbandhaniから考えました。今年の二月に発足し、まだメンバーも少ないのですが、これからどんどん活動を広げていきたいと思っています。



サークルの仲間達と

English Communication 2004-Brighton

担当教員：人間総合科学科目講師 Scott Vesty

Don't tell anyone I said this, but if you were to ask the vast majority of New Zealanders, especially those from Christchurch—a city, which claims to be 'the most English city outside of England', where they would most like to visit, the overwhelming response would be "England". I am no different, so when I received a call from Matsue-sensei one afternoon in March asking if I could assist Alan with English Communication this year, the choice was not a difficult one.

Five months, a half a dozen English Communication lessons, Shrek 2 twice and some other in-flight movies later and I'm being whisked away from Heathrow Airport in a mini van with a Yorkshire-born driver with an accent so strong I'm struggling to understand him and six very understandably excited and somewhat surprisingly relaxed students.

The journey into Brighton from London is smooth and we arrive ahead of schedule. With the words "welcome to Brighton everyone", however, the mood of the bus visibly changes and there are now six very quiet AUHW students suffering from differing degrees of nerves as they realise they are now only minutes away from meeting their host families for the first time. To be honest, I think that first day was the only time I saw any of our students nervous for the entire trip as they all soon relaxed and started making the most of their three weeks in England.



Beachy Head

Starting with the very first person our students met every morning, a very friendly semi-retired man at reception, to the head of the school, the Eurocentre staff were all very professional and welcoming. And with the mixture of students from various parts of the world, our students were meeting, studying with and socialising with young people from many diverse backgrounds and cultures. It was wonderful to see them communicating in English with their Swiss, Italian, German,

Chinese and Korean classmates, among themselves, and even with the other Japanese students studying in Brighton.

English Communication is a course to help AUHW students improve their communication skills; enhance their international outlook through cultural awareness and understanding; and boost their confidence and independence, and I am sure all the students who went to Brighton this year will agree they have achieved all of these targets and more.

イギリスでの思い出

看護学科2年 伊藤 亜希子

ブライトンでの3週間、私は国籍を超えてたくさんのお会いを経験しました。ホームステイ先ではコロンビアとイタリアからの留学生とステイメイトとなり、お互いの国の言葉で挨拶したり名前や書き方などを教えあったりしました。また学校では、スイス・フランス・ブラジル・メキシコ・韓国の方々と同じクラスでした。授業では2～3人のグループになってお互いの国のことを紹介したり、文法を勉強しました。クラスのみんなとは夜にパブに行ったり、回転寿司の店にランチに行ったり、楽しい時間を過ごしました。私の最終日には内緒で花束を用意してくれていて、思いもかけないことに驚き、感動して少し涙ぐんでしまいました。日本人以外の人との会話は英語なのに、伝えたいことを英語で表現することができなくて伝えられないということがたくさんありました。でも、真剣に聞き取ろうとしてくれるので、私も伝えようと努力をすることができました。

行くまでは3週間は結構長いなと思っていましたが、3週間というのは本当にあっという間に過ぎてしまって、もっと長くいたいという気持ちでいっぱいになりました。国籍も年齢も様々な人たちと友達になり、一緒におしゃべりして遊んでたくさんのお思い出を作ることができたことは、夏の良い思い出となりました。



学校での最終日にクラスメイトと

「形式重視」から「内容重視」の国際交流へ

理学療法学科助手 李 相潤

近年、国際交流が重要視されるなか、本学の理学療法学科（本学科）では「冬のソナタ」によりさらに親しくなっている韓国との交流を3年間継続している。そのうち、本学科における国際交流は、他では真似できない特色がある。それは姉妹学科である韓国仁済^{インジ}大学校医工学大学物理治療学科（仁済大学校）との交流内容で、臨床実習を主体としていることである。既存の多くの国際交流を見てみると、施設見学や友好目的などが中心となっており、多忙な日程に伴う交流が主流である。つまり、形式が重視されることが多いといえる。

それに対して、本学科と仁済大学校は相手側の臨床で実際に患者への実習を行うことにより、相手国の医療現場や社会事情などを肌で感じることができるユニークな交流である。無論、実習に挑む学生達は言葉の壁や実習における様々な制約などはあるものの、国際人として一回り大きくなっていることは間違いない。

本年度で、本学科の国際交流は3回目を迎えるようになり、国際交流のあり方として「形式重視」から「内容重視」の国際交流へ安定しつつあるが、未だに不安と不備が多いことも否定できない。しかし最近、本学の学生達は自ら韓国語サークルを立ち上げるなど、今まではなかった光景も現れており、国際交流に取り組む学生の姿勢に大きな変化が見られるようになった。これらのことを踏まえ、今後本学科の国際交流はさらに内容を重視した国際交流へ発展していくと考えられる。



韓国の病院での運動療法の実践

Yale大学から下北半島へ ～研修生がみた青森県の地域看護～

看護学科助手 工藤 奈織美

太平洋を隔てたアメリカYale大学から、Lalaさんが地域看護を学ぶためはるばる青森にやってきたのは、6月末のことでした。

Lalaさんは大学院1年で、社会人経験があり政治経済にも詳しく、将来はアメリカで地域看護をやりたいという夢を持っていました。

まず、Lalaさんは看護学科4年生の地域統合実習に同行しました。研修先は下北半島にある東通村です。Lalaさんは学生と一緒に村内に宿泊し、地域での生活を体験しながら、地区公民館で痴呆・転倒予防教室に参加して高齢者の血圧測定を行ったり（写真）一緒に作業をしたり、また保健師と家庭訪問に行ったりと地域看護の前線でいろいろな体験をしたのでした。



ただいま血圧測定中の3人（真ん中がLalaさん）

東通村の人たちは、Lalaさんにやさしく声をかけてくれます。「私はLalaといいます。よろしくお願ひします。」「あんた、日本さ嫁に来たんだか?」「いいえ。勉強しに来ました。」こんなやりとりが毎日行われました。

この研修でLalaさんは、日本とアメリカの政策や保健福祉制度の違いをととても感じていました。研修レポートには、東通村という小さな地域で、保健師が住民にさまざまな保健サービスを提供していたことに驚き、地域における看護職の役割を考えさせられたと書いてありました。また東通村でのさまざまな人との出会いから、行政と住民との協働・連携の大切さに気づき、大きな収穫があったようでした。

食事に関するアンケート結果報告

健康管理専門部会・看護学科講師 角濱 春美

近年、社会生活の急変に伴う食の崩壊が特に若い人たちの間で広がっています。我が保健大学でも、それまで家族のもとで暮らしてきた学生が一人暮らしとなり、食生活の管理も自分自身で行わなければならない、これに伴う体調の変化や戸惑いや不安が生じているという声が聞かれました。そこで、学生の健康を守る役割を担っている健康管理専門部会では、学生の食生活の実態を知ることを目的にアンケート調査を行いました。今回はこの結果の一部を報告したいと思います。

アンケートの対象は1年生～4年生までの本学学生で、340名の学生が回答しました。住んでいるところは、一人暮らしが72.1%と最も多く、次は自宅23.2%、下宿が3.5%でした。日中の学習に集中するためには、朝食の摂取が必要です。しかし、毎日食べる人が58%と、約40%の学生が朝食を時々または、常時食べないと回答しました。その理由は、「時間がない」、「食べたくない」、「食べる習慣がない」、「準備が面倒」でした。実習等で朝、脳貧血を起こす学生を目にします。その学生に朝食摂取のことを尋ねると、「食べてきませんでした」という回答がほとんどです。学生生活では、たくさんの知識を吸収し、感受性を高め、しっかり活動することが必要です。早起きの生活リズムにすることと、手軽に朝食を準備できることが必要ではないかと考えます。昼食や夕食はほとんどの学生がしっかりと摂取できていました。

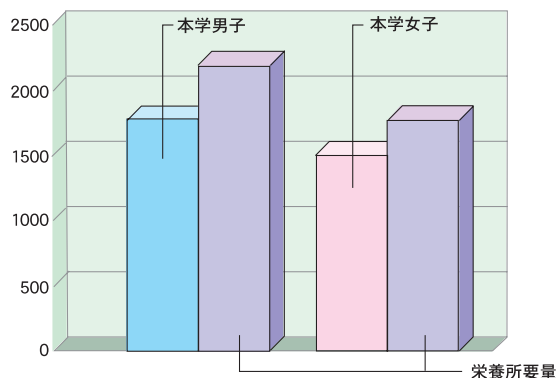
一日の献立表を記入してもらい、これのカロリー計算を行いました。男子が1687Kcal、女子が1483Kcalでした。20歳に適切なエネルギー量は、男子約2300Kcal、女子1800Kcalであり、どちらもかなり足りないという結果でした。更に、ダイエット希望のある学生が80%と多く、エネルギー不足が心配される結果となりました。実際に、学生のとっている昼食等を見ると、非常に量や種類が少なく、小食であるという印象を受けます。健康診断の結果ではそれほど痩せ型の学生は多くないため、まだ心配はいらぬのかもしれませんが、このところの学生の風邪の引きやすさや、線が細く、疲労しやすいことなどと考え合わせると、バランスの良い、しっかりとした食生活で、未だ成長途上にある身体をしっかりとつくる必要があるのではないかと考えます。

1ヶ月の食費は、1万円～2万円が59%、1万円未満が17%と食事に余りお金を使っていない現状が

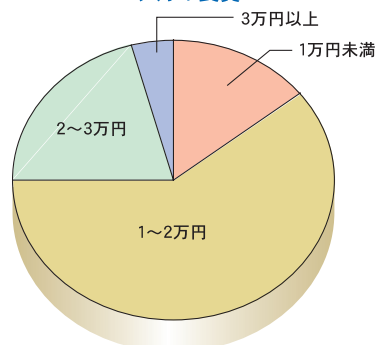
見えてきました。10万円程度が生活費全体であるとする、その1割程度しか食費としていないこととなります。アルバイト先で食事が摂れるなどで、節約している可能性もありますが、本大学の学食で一番品数の多いA定食は1食500円です。昼食をA定食で20日間食べただけでも1万円となります。このように考えると、食事にもう少しお金をかけることが必要ではないかと考えられました。

人々の健康を守る、看護、理学療法、社会福祉の各学科で構成されている本学だからこそ、自分自身の健康を守るための基本の基本である、食生活をもう一度見直し、学生には、若い今を張り切って過ごしてもらいたいと思います。そのために、健康管理専門部会ではアンケート結果を示して自覚を促したり、前期には1年生を対象とした金曜料理教室を開催したりしました。学習している内容からも、食事や栄養素の大切さを学ぶ機会も多い学生たちですので、今一度、その意義を見直して欲しいと考えています。

1日のカロリー量



1ヶ月の食費



金曜料理教室は食育？

人間総合科学科目教授 藤田 修三

食育、飽食、スローフード、サプリメント。これらはよく聞かれる言葉であり、もちろんわれわれ健康・栄養分野の研究・検討テーマでもあるわけですが。食生活は身近な健康問題であり、日々の食生活の積み重ねは健康に大きく影響を及ぼします。日本の場合、高度経済成長のお陰？でしょうか、飢えから飽食の時代に至るプロセスがあまりに短く、そのため食生活の変化や生活の合理化が急激に進み、対応の遅れが生活習慣病となって表面化しています。これは変化の時代を生きた中高年層の問題だけではなく、次世代である子供や青年の健康問題まで波及しています。本学では学生の健康管理に関して、これまでも健康指標の管理、メンタルサポートなど実績を積み重ねてきていますが、今回は学生の食生活にスポットをあて、その一環として料理を学生の自己健康管理に役立ててもらおうと6回にわたる「金曜料理教室」の企画が立てられました。

教室では単においしい料理を作るだけではなく、むしろ健康づくりに活かせる料理が学べることを目的としており、そのため青森県栄養士会に相談し、地域で活躍中のベテラン栄養士さんに講師を依頼しました。テーマは「10分でできる簡単朝食メニュー」、「季節の素材でバランス食」、「薄味でもおいしく」など、いずれも興味ある健康づくりに配慮されたものばかりで、かつ料理の基本もしっかりと指導していただける内容です。さて教室を開講すると毎回の受講者が20数名、延べ133名の参

加がありました。看護学科の学生がほとんどで、理学療法学科の学生が若干名と学科の偏りがみられました。また積極的に参加してくれる男子学生や、毎回参加協力いただいた教職員もいました。教室は概ね好評で、ためになったという声が多く聞かれましたが、なかには参加費500円が高いという意見もありました。高いですかねえ。

「食」という字は「人を良くする」と言われますが、農業を、食材を、料理法を、栄養を知ることは、健康のため、環境問題を知るため、人間性を豊かにするために大切です。今回の教室を見送られた学生、教職員の皆さん、楽しい料理教室から健康づくりを始めてみませんか？ちなみに「食」の上のカムリは、実は穀物の倉を表すのですが、意味不明になるので料理研究家服部幸應氏がわかりやすく表現し直したようです。



保/健/室/雑/感

保健嘱託員 津内口 恵子



全国的に、規模の大きい大学には保健管理センターがあって、医療スタッフが常駐し、学生および教職員を対象に診療および健康管理を行っています。

しかし、本学は大学としては規模が小さいためか、開学当初から保健管理センターは設置されておらず、傷病の応急処置や健康相談など、保健管理はおもに保健室が行っています。

保健室の利用状況をみると、他の大学や高校などと違って体育の授業や運動部の活動が少ないせい、大きなけがは少なく、また授業中に具合が悪くなり休養に来る学生もあまりおりません。

一方で、健康相談に訪れる学生は結構います。相談内容はさまざまですが、メンタルヘルスに関する相談が多くなっています。これは全国的な傾向でもあります。

また、ほぼ毎月1回行う産婦人科医師による健康相談は、他大学にはあまり見られない本学独自のものです。女子学生に対する大きなサポートになっています。

開学当初から学生を見ていて思うのは、1年生と4年生の大きな違いです。講義や演習で専門知識や技術を身に付け、学外での実習を通して社会の厳しさを体験することで一回り大きくなり、自分の進むべき道を見定め将来へのスタンスが決まることでもう一回り大きくなり、また仲間との煩雑な人間関係をうまく乗り切ることさらに成長し、学年が進むに従って人間が大きくなって行くようです。

たとえば全学生を対象に行った「喫煙」や「食事」などに関するアンケート調査をみても、回答に寄せる関心と責任感の違いは一目瞭然です。自分がして欲しいことをさりげなく他人にしてあげられる、そんな人間に育っているように思います。

「知のトライアングル」に向けて

博士課程設置準備委員会副委員長 鈴木 孝夫

国公立大学を問わず大学の使命は、「知の継承」、「知の活用」、「知の創造」の三位一体すなわち『知のトライアングル』として捉え、説明することが出来ます。これら三位を我が青森県立保健大学に当てはめると、

「知の継承」：保健医療福祉分野における専門職者・高度専門職者の育成であり、学部ならびに大学院修士課程が担当

「知の活用」：地域住民のニーズに対応した保健医療福祉に関する地域貢献であり、主として健康科学教育センターならびに研究センターが担当

「知の創造」：国内外に通用する保健医療福祉に関する普遍的な真理の探究であり、主として健康科学研究センターならびに「大学院博士課程」が担当

となります。

現在の教育研究体制においてもこれら三位が着実に実行・実践されていることは紛れもない事実ですが、「大学院博士課程」が設置されることにより「知の創造」基盤が飛躍的に安定・向上し、均整のとれた三位一体になることが予想されます。また、第三者が大学を評価する場合、「大学院博士課程」の有無は極めて重要なファクターとなります。

設置準備委員会では昨年10月から30回に及ぶ討議・検討を重ね、本年6月末に「大学院課程変更認可申請書」を文部科学省に提出しました。この「博士課程」構想は学内のコンセンサスは素より、本学の設置者である県当局の許可が必要であり、行財政改革のさなか担当部局の「否」を前提とした折衝・協議・説得には多大なエネルギーを要し、3月初旬に漸く申請許可がおりました。提出後の担当教員の審査、設置審議会での審議において大きな問題はなく、11月末には設置認可される見込みです（この稿の出版時には認可済であることを願います）。現在委員会においては、広報・入試・カリキュラムの3分科会を立ち上げ、認可後の具体化に向けて協議・検討を重ねております。

『知のトライアングル』に向けて、本委員会の委員長・新道学長のまさにご専門「^{*}^{*}生みの苦しみ」から踏み出す今、予算がない、歴史が浅いという「言い訳」に隠れて大学自体の「知がない」と言われたいよう、『知』さらには『英知』のトライアングルを共に作り上げましょう。

健康科学研究科修士課程における平成17年度カリキュラムの改正

健康科学研究科長 新道 幸恵

本学では、平成15年3月に健康科学部で最初の卒業生を社会に送り出すのを機会に、引き続き4月に、修士課程を発足させました。修士課程は、保健医療福祉の高度専門職業人の育成を主な目的として、地域保健福祉学分野、生活健康科学分野、理学療法学分野、看護学分野、の4分野に、14領域の編成で出発いたしました。カリキュラムは、4分野の全ての学生が履修する共通科目、分野ごとの特有な科目である専門支持科目、領域に特有な専門科目によって編成し、延べ93科目を設けています。修士の学位取得のためには、32単位以上の修得と、修士論文または課題論文（専門看護師コース）の提出が要件になっています。

平成17年3月に修士課程の第1回生が修了して、完成年次を迎えるのを機会に、4月から博士課程の開設を博士課程後期課程の開設として文部科学省に申請しました。その結果、修士課程は博士課程前期課程として位置づけられることとなります。これらの事情から修士課程の構成やカリキュラムの編成を見直しました。その結果、4分野構成はそのままにし、看護学分野のみ、看護教育・管理学領域を看護教育学領域と看護マネジメント領域に分離させ、生活支援看護学領域を高年齢者・リハビリテーション看護学領域に変更し、周産母子看護学領域を周産母子と小児看護学の各専門看護師コースと各論文コースとすることへと変更いたしました。それに伴って、カリキュラムも改正しました。4分野全体に関わる共通した変更は、非常勤講師から専任教員へ、定年退官の教授の科目を後任教授へと科目分担に関わるものです。そのほかに、社会福祉の専門性の強化のために2科目新設をし、効果的な授業展開を目標にした科目統合を行い、看護学分野における領域変更に関連した科目の新設と廃止を行うなどの改正をします。

修士課程における学習はライフワークを見つけたり、深めたりする場でもあります。学生の皆様にとって、本学の修士課程の学びを通して、生涯の友人や教師に出会う場になるように願っています。

平成16年度修士論文中間発表会に出席して

人間総合科学科目教授 藤田 修三

10月14、15日の両日にわたり修士論文(特別研究)の中間発表会が催されました。中間発表会は2年次院生がこれまで進めてきた研究経過の報告と今後の展望を示し、それに対するコメントやアドバイスを受ける会です。今回発表した院生は23名で、発表時間10分間という制約されたなかで発表し、会場から9分間の質疑を受けました。フロア参加者は学生、教職員併せて約40名と予想を裏切らない多くの参加があり、また全ての発表に立ち会っていただいた数名の教員には、日頃の院生の研究を見守る姿勢に対して敬服するばかりです。初日の質疑応答は殆ど教員ばかりでしたが、2日目ともなると研究科長のアドバイスが効いたのか院生も積極的に質疑に加わり、さながら学術集会の雰囲気さえ感じられる会となりました。また質問に応えた院生も真摯に自身の考えを述べ、研究者として必要な発表プロセスを学んだことと思われま



中間発表会の様子

の雰囲気さえ感じられる会となりました。また質問に応えた院生も真摯に自身の考えを述べ、研究者として必要な発表プロセスを学んだことと思われま

発表テーマは患者および対象者のケアに関する研究、保健管理に必要な環境整備に関する研究、健康を維持・増進する種々の要素の研究など多彩、多岐にわたっており、いかに健康科学分野が学際的であり、同時に総合的な研究が人間の健康・保健学に結びつくことを考えさせられました。

修士課程開設からはやいもので1年半が過ぎました。来年2月に予定されている研究成果の公開発表会(通称、公聴会)まであと3ヶ月となり、今回の発表での収穫を糧に精進し、満足できる研究成果が上げられることを院生諸君に期待します。同時に博士課程の開設が来春に予定されていますが、発表者のなかから自らの研究を発展させ、保健大学の発展に寄与しようという志をもつ学生の現れることを願うところです。

大学院生活の終わりを迎えて

健康科学研究科2年 和久井 鉄城

私が青森県立保健大学の大学院に進んで1年9ヶ月が過ぎようとしています。特論と呼ばれる一般教養および各分野の専門的な講義と同時に修士論文に取り組んできました。そして、今年10月には修士論文中間発表会が無事終わり、修士論文完成に向けて追い込みをかけるとともに、卒業に向けてカウントダウンが始まった感じがしています。

本学の大学院生は、私のような学部からそのまま大学院へ進学する人もいますが、保健・医療・福祉の様々な臨床で働き、その知識・経験を踏まえて大学院に来ている院生が大半を占めています。ゆえに、講義のスタイルも学んだことをどのように臨床で生かしていくか、または各個人が得た臨床での様々な問題をどのように学問に生かすかという要素が強く、先生や大学院生同士とのディスカッションによって、1つの課題に取り組むといった形式が多くとられているように感じます。ディスカッションを通して、様々な分野の意見を耳にし、私個人としても1つの課題に対していろいろな側面から捉えることができるようになったと思います。また、実際の臨床における取り組みを知ること出来るのが大学院で学ぶことの強みではないかと大学院生活を通して感じています。

一方、修士論文は大学院生にとって本分であり、成果を上げる必要があります。本学の大学院は、研究を行う上での施設・設備ともに優れていると思います。修士論文の内容は、大学院の構成から分かるように、私が所属している理学療法学分野だけではなく、地域保健学、生活健康学など様々な分野によって、幅広い研究が実践されています。私に関して言えば、膝関節に対する衝撃と筋活動の関係について研究を進めており、現在はデータの収集・分析に取り組んでいます。

来年の3月には大学院を修了し、新たな道へと進んでいきますが、大学院で学んだ知識、そこで得た経験を元に誇りを持って各分野の専門家として活躍することを望み、そのために努力し続けていきたいと思っています。

大学教育40年を省みて

人間総合科学科目教授 赤坂 和雄

大学開設以来6年、月日の経つのがこんなにも早いものかと今更ながらに驚かされる。保健大学在職は6年間といえども開設準備室委員としての奉仕も入れれば当大学奉職は8年近くになるだろう。青森への赴任を決意し札幌を離れると思った最後の寂しい年のことを思い出す。我が人生において青森赴任はこれほど大きな決断はなかったと今でも思う。34年間の前任大学での色々な行事、入学式、新入学生対象の合宿、大学祭、ゼミ生との小旅行、卒論指導で苦しんだ日々、卒業式などの思い出が走馬灯のように駆けめぐった。そしてこれらすべての行事がこれが最後だと思った時の寂しさを今回また味わうことになったのだ。

開学当初の忙しさは忘れることが出来ない思い出になった。開学当初の2年間は夜の10時前に帰宅したことがないほどの忙しさであった。勿論私だけではない。多くの教職員がそうだった。私が帰宅するときでも事務局の人たちは黙々と業務についておられたのが目に浮かぶ。開学当初の大学ならどこにでもあり得る姿だ。人間総合科学科目主任教授としての役割で、昼の授業以外は会議の連続だった。そんな中での授業の準備は夜になってからせざるを得なかった。青森に慣れるのも時間がかかった。仕事が終わってからの買い物はまず無理だった。当時はレストランもスーパーも10時を過ぎると終う店が多かった。夕食の取れない日々が続いたのも今となっては苦々しくも楽しい思い出だ。

そんな生活の中での青森人との社会的なつながりは困難だった。時が経つにつれ、大学以外の人たちとの交流も生まれ、最近では色々な人たちから声をかけていただき楽しい生活になった。青森の自然も私をひきつける原因になった。春の桜、夏のねぶた祭り、秋の紅葉などは忘れ得ない光景となった。アラン夫妻からも時々声をかけていただき、温泉や食べどころを満喫し、来春青森を離れる時のつらさが待ちかまえているようだ。学長をはじめ教職員の方々のご親切にも感謝申し上げます。

50年の看護人生を終えて

看護学科教授 ライダー島崎 玲子

本大学での教員生活は、教職員の皆様のサポート、活気ある学生さんに囲まれ大変楽しく働くことが出来ました。そして、第17回の日本看護歴史学会の会長、20年来の研究テーマであった「日本の看護の戦後史」を出版することが出来ました。現在小山敦代先生の激励のもとに、看護学概論の教科書を執筆中であります。このように4年間という実に短い期間に、私の半世紀にわたる体験の集大成が出来ましたことは、青森県立保健大学の皆様のおかげだと感謝しております。

私が看護の職業を選びましたのは高校時代、両親を亡くし、戦後の不況の中で、自活を余儀なくされたからです。同志社女子大学英文科志望を諦めて、看護の道を選びました。卒後3年目に偶然フルブライトの留学試験があり、運良く合格して、1957年、憧れの米国に留学することが出来ました。

コロンビア大学Teachers Collegeは1899年、看護の卒後教育を始め、有名な看護理論家V.ヘンダーソン、アブデラ、ペプロー、ロジャース等を輩出しました。この大学には心理学者のカール・ロジャース、ソーンダイクやマズロー等が教鞭をとり、これらの理論の影響を受けて看護理論を構築したのです。この看護教育のメッカで勉学できて幸せでした。私は患者中心の看護や医師、社会福祉士、栄養士、リハビリ・セラピスト、オキュペイショナル・セラピスト等の医療チームと看護チームの連携という概念を学び、メモリアル癌センターで実習しました。1950年代すでに問題解決による看護が実施されていて、日本の治療中心の看護とは全く異なることを学び、看護の重要性を実感しました。1985年北里大学の助教授として帰国し、それ以来看護学概論を教えてきました。今患者中心の看護の理念が日本でも根付いてきたことに喜びを感じるとともに今は、看護という仕事を選んでよかったと思っています。保健大学の卒業生が、ここで学んだことを実践し、ますます日本の看護の質を向上させるように努力されることを願っています。

保健大学生活5年から得たこと

理学療法学科教授 福田 道隆

○檻の生活から大自然への開放

黒川紀章先生設計による近代美術を駆使した魅力溢れる建物である保健大学は安らぎと感動を与えてくれました。また窓からは勇壮な八甲田の山々を、近くには雲谷スキー場を朝な夕なに展望し、檻の生活から大自然への開放させていただきました。

○ヒューマンケアにおける保健・医療・福祉の連携・統合の重要性を深く認識できました。

○広範領域にわたるケア学習の必要性

パメラ・ミナリック教授の「疾患の中の心理社会的論点、コーピング」、「アメリカ人の価値観と米国のヘルスケアシステム」、ペンシルバニア大学コッター教授の「痴呆性高齢者のケア」などのすばらしい講義が印象に残っております。また人間総合科学科目の先生方から「コミュニケーション」、「学習方法(特にPBL, TYA方式)」を教えてくださいました。またフォートフォリオ学習についても研修を受けました。

○大学内での研究の歩み

経常研究費を頂き初年度から「脳画像の研究」を、15年度からは「上肢巧緻運動機能評価システムの開発」を行い、現在臨床応用の段階にきております。これも経常研究費による研究が少しずつ成果を見えています。また健康科学特別研究として、「青森県における周産期保健の現状と課題に関する研究」の一環として「乳児死亡症例の統計学的検討」「妊娠と出産に関する調査」を実施中であり、その成果から今後の「妊婦に対する保健指導のあり方」が明らかにできるものと期待されます。



左から赤坂教授、露木教授、福田教授、ライダー・島崎教授

真の幸せとは何か！

社会福祉学科教授 露木 敏子

「つきてみよひふみよいむなやここのとを

とうとをさめてまたはじまるを」 (良寛)

良寛(1758年～1831年)という子供と一心に鞠をついて戯れる姿を想像する。この歌は彼の人生観を表す一句である。人の世の営みは、昨日から今日へ、今日から明日へ、過去から無限の未来へとつながっていく。昨日は去ってすでになく、未来はまだこずして存在しない。あるのは生きている「今ここに」のときだけであり、その時をひふみよいむなと力をこめ、全心身で生きて行くこと、それが仏の説く道であるという。

21世紀の現在、良寛の生きた時代では想像も及ばない科学の発達、ある面、明日への予測を容易にする。例えば人工衛星による台風情報がそれ、はるか南の海上に発生した雲の塊を、やがて台風となって発達することを予測し、台風の進路、勢力、上陸地点を限定し、地域の被害の程度まで予想をする。その適中率は高い。また、さらにコンピューター(筆者が学生の頃には考えられない代物)の発展は21世紀に入りますます精密の度を増し瞬時に欲しい情報を提供してくれる。

過去半世紀、わが国のどの時代でも経験したことのない便利、快適そして、豊かな日常生活を享受してきた。そのこと事態否定する者は誰もいないであろう。しかし、一方でその豊かな社会で生きているわれわれに真の幸福感が薄いのはなぜか(自殺、虐待、強盗・殺人など社会問題が急増)、良寛曰く、人々はひたすら所有を求めることに意義を見出すとして、利害得失で成り立つ世界を捨て、別の価値の世界つまり仏の世界、心の世界、精神の世界、目に見えない価値に身をささげる決心をし、無為の人となった。やがて人々は良寛の深い無為の滋味にふれ心穏やかになって行くのである(逸話のエピソードからも知れる)。そして、ただただ正直を徳とし純粋な心を宝とした人生、権威や肩書き、財とは無縁の生涯を終えている。人は良寛に触れることにより知らずしらずのうちに自分の行き方を省みさせられる。有り余る物が、いつでも、安易に手に入る、そのことにありがたさなぞ感じることはないであろう、無を知ってそのありがたさを知る。文明の進歩が人間の幸せをもたらすというのは間違いだったのか? . . .

第3期生の就職活動本番！

就職対策専門部会

いよいよ就職活動が本格化し、4年生は就職試験等に真剣に取り組んでいます。第1期生及び第2期生の高い就職率をもとに、先輩に続けという意気込みで頑張っており、これから内定が増していくものと思います。3期生についても、これまで以上に充実した就職対策のための下記のような各種の事業を行っています。

【本年度の主な就職対策事業】

1. 第5期公務員試験学内講座の開設

医療職（看護職、理学療法士）を目指す学生を対象に教養試験（一般知能分野主体）対策を行っています。
《主な合格先》看護師（青森県8名、むつ市1名、岩手県5名、秋田県1名、秋田市1名） 保健師（宮城県1名）

2. 第3回就職合同説明会の開催

病院・社会福祉施設の人事担当者と学生（3・4年生）が直接面談して情報交換をする場を設定することで、県内定着率の向上を目指して開催しており、今年度は35事業所（24病院・11福祉施設）と約70数名の学生が参加しました。

3. 面接・小論文試験対策

模擬面接、小論文試験の添削指導等の個別指導を1人当たり複数回行うことにより、面接等に落ち着いて臨めるなどの効果が上がっています。

【第3期生の内定状況】

11月24日現在

学 科	卒業予定者(人)	就職希望者(人)	就職内定者(人)
看護学科	104	99	46
理学療法学科	23	21	8
社会福祉学科	38	33	11
合 計	165	153	65



就職合同説明会の様子

卒業生との初懇談会

健康科学教育センター長 伊藤 日出男

教育センターと学生委員会の共同企画により、本学卒業生から直接意見を聞くための懇談会を7月20日から23日にかけて弘前市、八戸市、青森市の3ヶ所において開催いたしました。大学で学んだことと現実とのギャップ、就職してよかったこと、卒後研修の状況についてなどが話し合われました。特に、大学で学んだことと臨床の現実とのギャップについて、いろいろな意見を聞くことが出来ました。

就職してよかったこととしては、「上司に恵まれている。精神科をやりたいかったので就職してよかったと思う」「仕事が辛くて帰りたいと思ったことはあるが、辞めたいと思ったことはない」「保健師9人の職場で県内では恵まれているが、早朝4時起きや検診は辛い。役所なので事務的な業務も多く大学で学んだこととのギャップは多いが、やりがいはある」「研修は出張扱いになり、殆ど希望を聞いてもらっている」「先輩がこんな研修に行ったら、と勧められるので行き易い」「楽しく働いている。カンファレンスがあっていいし、大学の先生方から指導を受けることも出来る」「看護師の中には保健師としての知識を持っていることによる違いを認識してくれ、良かったと思う」「専門学校卒の方がテクニックはあると思うし、礼儀や接遇などもしっかりしていると思う。研究面では自分の方がやっていた統計処理を教えたりしている」など、聞いていて心が温まる意見がありました。

一方厳しい意見としては、「とにかく忙しいため、月2日しか休みを取れない」「利用者から話を聞く時間が取れない」「手当ては曖昧で何の手当てか明細のないものがある」「回復期病棟はできたばかりで理学療法士は残業が多く、手当てもない。楽しいとは感じられない」「ついていくのが精一杯でよかった」「患者をこなすのが一杯で、正直言って勉強どころではない」「水曜半休、土曜半休で土日の研修にも行けない」「施設では介護業務が大部分で、社会福祉士としての仕事はできない」「大学で学んだことは殆ど役に立たなかった。大学卒の誇りや喜びを感じることは殆どない」「10年のレベルにあると思っても、無理やり2、3年レベルに引き戻されるようだ」「何か事故を起こして辞めてしまおう」「助産師が少ないので、頼りにされているのは分かるが、あまりにも勤務が厳しいので辞めようかと思うことがある」など、身の引き締まる思いのする意見もありました。

最初の懇談会としては、出席者が少なかったのは残念でしたが、教員側の助言も適切で内容は充実していました。これからもぜひ継続していきたいと考えています。出席した卒業生の皆さん、有難うございました。

看護師として働いて

長谷川ふみ子
(看護学科2期生)

看護師として病院に勤務し、半年が過ぎました。私の勤務する病院は急性期医療を担っており、私は内科に所属しているため化学療法、放射線療法等を通して、一日約8人の患者様を担当し生活の援助や治療の介助等行っています。就職した頃は、病棟の規則や一日の仕事の流れを把握することに必死で、ただただ業務をこなすような日々でした。また、臨床では思うようにいかない事が多く落ち込む事が多々ありました。

しかし、日々学んだ事がケアに活かされ、患者様から喜びの言葉を頂くことも多く、とてもやりがいのある仕事だと感じています。また、職場の雰囲気が明るく、相談できる先輩ナースもいるため前向きに仕事に取り組む事ができます。

まだまだ覚える事も多く不安な事だらけですが、患者様との関わりの中で様々な事を学びプリセプターや病棟ナースからどんどん知識を吸収し、自信をもって看護を提供できるよう成長していきたいと思っています。

就職してから学んだこと

岩谷 奈津子
(理学療法学科2期生)

私は現在、碓ヶ関にある黎明郷リハビリテーション病院に勤務しています。就職してから半年が過ぎ、職場の環境にもだいぶ慣れてきました。実際の治療場面に関しては、当たり前ですがまだまだうまくできず悩むことも多く、先輩PTや他部門の方に助けられながら、なんとかやっています。10月からは学生時代から興味があった分野である訪問リハにも携わることになり、これを機会に勉強させていただこうと思っています。

学生時代は自分がPTとして働いている姿など

想像もできず、本当にできるか不安でいっぱいでした。実際に働いてみて、今までの勉強不足を痛感する一方、臨床場面から学ぶことの多さに驚いています。また、各種研修会や学会などにも参加させていただき、そこでも様々なことを知りました。新しい知識や経験を積み重ねることは、苦労もありますが、とても楽しいことだと感じています。色々なことを学びたい、たくさんのことを吸収したいという思いは学生時代よりも確実に強くなっています。これからも今の気持ちを忘れず、常に学ぶ姿勢を持って数多くの経験を重ねていきたいと思っています。

就職した今、思うこと

本郷 潤
(社会福祉学科2期生)

私は、北海道の新得町という人口8,000人弱の小さな自治体に採用され、役場職員として働いています。私が配属された係は、町内会や消費者協会などの住民団体や、NPOなどの活動の支援を主な業務としており、その他にも消費者相談を受けたり防犯や交通安全の啓蒙活動を行うなど、町民活動へ幅広く関わっています。当然、町民の方と一緒に活動する業務も多く、その中でできた様々な人とのつながりを楽しみながら毎日の業務をこなしています。

そんな毎日の中で感じるのは、大学生活で学んだことはとても大きかったのだな、ということです。大学の講義からだけでなく、ボランティアでもバイトでも、友達とただ漫然と過ごした時間さえも、現在人と関わる上での大きな財産になっていると感じます。いわゆる福祉職からは離れた業種であるため、自分の進路として正しかったのかと悩むこともあります。自分の大学生活を礎として、法や規則の遵守のみで満足することなく、「この人は何を求めているのか」として「自分は何ができるのか」という意識を常に持ちながら町民の方々と接していきたいと思っています。

心がかようコミュニケーションを考える会

人間総合科学科日教授 赤坂 和雄

地域の人たちを対象に、国際健康コミュニケーション科学学会が主催で、青森市佃元気協力隊の支援を受け「地域におけるコミュニケーション」の演題で一般公開の形で講演会が平成16年1月30日元気プラザで開催された。講演会終了後、多くの参加者からこのような講演会をもう一度という合唱があり、3月21日「寺子屋フォーラム」と銘打って基調講演とシンポジウムが元気プラザで開催された。佃元気協力隊は勿論のこと、新聞社、テレビ局などの報道機関にも協力していただき、多数の参加者を迎えることが出来た。会場を提供してくださった元気プラザの方々にも快く協力いただき大成功だった。



会場が元気プラザだったということもあり、参加者は主に佃地区界隈の人たちで、高齢の方々の参加者が多数を占めた。退職後の生活では在職当時とは異なり、何かと人間関係が疎遠になりがちになっていくのが大きな問題となっていくことに懸念を感じておられる方が多かった。そういう人たちとの交流がスムーズに行うにはどうしたらいいのかなどの議論が展開された。

「心が通うコミュニケーションを考える会」(以下は「考える会」)は上記の講演会が母体となり、4月8日発起人会が組織され、本年度のおおよその例会日程などが決定された。この考える会は、「家族における人間関係やコミュニケーション」、「高齢者の人間関係」などが大きな研究課題だ。

例会も4回を重ね、現在は第5回の例会を検討中である。第1回例会はボブ・リボウィッツ氏の「外国から見た日本人のコミュニケーション」で、リボウィッツよし子教授が通訳を務めた。第2回例会は川内規会氏が「元気な高齢者になろう」、第3回は「音楽を通してのコミュニケーション」というテーマで金子琴美さん(東京学芸大学大学院生)のフルート、西田純子さん(東京学芸大学大学院生)のピアノ演奏、第4回例会はシエスタク・ワレンティン氏(青森大学講師)が「日本人とのコミュニケーションに関して」などのテーマで例会が進んでいる。第5回は「医師と患者のコミュニケーションを考える」のテーマで基調講演、シンポジウムを1月15日開催で予定し、準備にとりかかっている。

2004アテネオリンピックにおける医学サポート

理学療法学科教授 成田 寛志

今年8月のアテネオリンピックに参加しました。テコンドー競技に出場する岡本依子選手を医学サポートするためです。23日から1週間ほど滞在しましたが、アテネの日中は日差しが強く、木陰の涼風が心地よく感じられました。選手村では4階建てマンションの2階3戸のうちの1戸4LKがコーチと私の居住スペースでした。丁度、女子柔道チームと入れ違いで、部屋のシャワールームにはスヌーピー柄の垢すりの置き忘れがありました。期間中は選手村と競技会場の往復ばかりで、山頂の神殿もエーゲ海のクルーザーも



会場にて



シャトルバスからしか眺めることができませんでしたが、連盟の分裂問題で個人参加となった岡本選手を心理的にもサポートできたと思います。このような競技からレクリエーションまで安心してスポーツを行えるようなシステム作りが急がれます。

壮行会にて岡本選手と

アテネ日本大使館にて
話題の室伏選手と

■地域の保健医療福祉職の生涯学習と教員の教育研究を支援する

健康科学教育センター研修科長 石鍋 圭子

本学には学部、大学院と並び健康科学教育センターと健康科学研究センターがあります。教育センターには研修科と国際科があり、研修科は主に地域貢献を目的として県内の保健医療福祉の専門職を対象とした研修事業を行っています。また、卒業生や教員に対する教育・学習支援も行っています。平成16年度の事業を紹介します。

まず、教員が企画・運営する研修会への助成です。今年度は、「看護職のための家族支援研修」、「理学療法臨床実習指導者研修」、「研修修了者の人材活用一スペシャリストをどう活用するか」「介護老人保健施設で働く看護職に対する応急処置・救命処置研修会」、などの7件が採用されました。

また、県内の保健医療福祉専門職と本学教員が共通のテーマで意見交換する「ケアマネジメントフォーラム in 青森」は今年で第4回目を迎えました。他にも教育改善研究を目指す教員への助成や研究成果を一般市民へわかりやすく伝えるブックレット「健康と生活シリーズ」の出版、あるいは卒業生の実態調査を実施しています。さらに、平成17年度からは教育センターに、救急看護認定看護師と認定看護管理者セカンドレベルの2つの新しい教育課程が開設される予定です。

教育・研究に多忙な毎日、教員にとって、これらの事業運営は労を要することですが、研修会参加者の多くから好評を得ており、地域貢献がすなわち自らの研鑽にもなると考えて頑張っています。ご協力をよろしくお願い致します。



ケアマネジメントフォーラム in 青森

■平成16年度国際科活動紹介

健康科学教育センター国際科長
リボウィッツ志村よし子

「世界に目をむけよう」と始まった、国際科活動の一部をここで紹介いたします。

(韓国) インジェイ大学理学療法学生交流は、3年目になり教員の交換も行われ、ごく当たり前になりつつあります。学生の中では、ハングル語のクラブも生まれました。

(イエール大学) イエール大学生が、本学4年生の地域看護学に加わり、むつ、浅虫などで実習し、高い評価をいただきました。今後も期待されています。本校からも、2人の教員がイエールで研修を行いました。

(ベレノバ大学) 米国フィラデルフィア市の大学から、学生の国際看護研修の下見調査で来青しました。プログラム、人材、宿舎、関係施設を見学され、来年度は8人の学部4年生をお迎えする予定です。

(ペンシルバニア老年看護学教授の招聘) 「高齢化社会での取り組み」で世界的に活躍しておられるコッター教授を招聘しました。地域の高齢者施設の方々、学部生・院生、教職員(FD)を対象に講演されました。講演内容はペン大のホームページに掲載されています。

<http://www.nursing.upenn.edu/centers/hcg-ne/news.htm>

(出張交流) 英語科の先生方が、青森県内の高校を訪問し異文化理解を深め、学生・職員等の交流を持っています。田子高校では、街全体で歓迎していただきました。

(JICA地球市民講座) 地球上の多様な文化や国際協力の理解促進を図る為、教員を対象に教材研究・開発の場を提供する講座です。活発な勉強会でした。

(国際科学生ボランティア) 今年新しく誕生しました。外国人学生との交流、学内外の案内、Big Sister/Brother制度を構築中です。

(その他) 職員英語力増進クラスは、大学院生クラスも発足しました。ドミトリー(英語版、韓国版)、周辺地図、生活の手引、グッズ等そろいつつあります。



コッター教授を囲んでの記念写真(左から4番目がコッター教授)

日本健康科学学会第20回学術大会を開催して

学術大会長 中村 恵子

日本健康科学学会第20回学術大会は2004年9月24、25日に開催しました。初めて東北地区にて開催になりましたので青森県の特徴を活かした学会にしたいと考え、企画委員を中心に約1年前から準備を致しました。学術大会のメインテーマは第20回を記念して「健康科学～過去から未来へ～」と表し、「日本健康科学学会が果たしてきた役割とこれから」を基調講演として日本健康科学学会長に講演頂き、特別講演は青森県埋蔵分化財調査センター福田友之氏による「ヒスイ分化と青森」について縄文時代の青森の文化や流通のご講演を頂きました。この講演は縄文時代の暮らしや流通への興味を引かれたお話でした。シンポジウムは「健康増進法は健康行動を変えたか？」と「未来を拓く健康マネジメント」の2題に各5名のシンポジストが登壇され、日本健康科学学会らしく、多様な観点から議論されました。司会の先生方のご苦労されたことと思います。会長講演は「看護学と健康科学」とし、本学術大会長を看護職が務めたのは2人目だったため、看護学と健康・健康科学の接点や救急看護学と健康科学について触れました。会場になった青森駅西側のぱ・る・る プラザ AOMORIには、様々な職種の方々が約300名参加され、シンポジウム、一般演題（口演、ポスター）



会長講演

に熱心な発表や討議がなされました。学術大会に続き市民公開講演会も開催し、青森の地場企業の活躍と佐藤初女氏のお話を頂きました。事前の広報が十分でなかったため、公開講演会への参加は

予想していたほどの参加はありませんでした。今回の学術大会を開催するにあたりましては、本学の教員に企画委員や実行委員または開催事務局として多大なご協力を頂き、学術大会がスムーズに進行致しましたことに紙面をかりて感謝致します。

第25回日本看護科学学会学術集会開催について

学術集会長 新道 幸恵

日本看護科学学会は1981年に発足して、現在、会員数は4,200人余りになり、看護系の学会としては最も規模の大きな学会です。当学会は、発足以来看護学の発展を目標にして様々な活動をしてきました。その主なものとしては、学術会議への登録学会となるための活動で第14期（昭和63年9月）に第7部会（医・歯・薬学）に精神医学研究連絡委員会所属で認められております。近年は、グローバル化を背景として、英文学会誌の発行の準備が進められており、間もなく実現しそうです。

昨年の12月の総会で、次期学術集会長に選任され、今年7月から学内の教員による企画委員会を発足させて準備を進めています。平成17年11月18、19日の2日間、青森市文化会館とホテル青森において開催することにし、会場予約もすませたところです。メインテーマを「いのちに向き合う看護—ヒューマンケアにおける看護科学の挑戦」と決定しました。このテーマにふさわしいプログラムを組み、演題募集をすることがこれからの準備の大きな課題です。2日目の11月19日には、県内の方々に看護を理解して頂く機会になるように、「いのちをみまもる」と題した市民フォーラムを開催する予定です。

トピックス

理学療法学科三浦雅史講師が発表した研究論文「除雪動作が体幹・下肢の筋活動量に及ぼす影響—Lifting動作との比較から—」が2004年度の東北理学療法士学会最優秀賞に選ばれ、表彰されました。

平成16年度看護学科特別講義 「笑いのちから」

看護学科長 上泉 和子

平成16年度看護学科特別講義は、10月19日に、角辻豊（すみつじ・のぼる）先生をお招きして開催しました。角辻先生は大阪大学医学部を卒業され、現在は角辻診療所所長、大阪大学医学部講師としてご活躍です。

先生は精神医学が専門ですが、診療のかたわら、「笑い」について、発達学的、生理学的、免疫学的、社会文化的、言語学的にと、笑いのルーツからメカニズム、健康との関係にいたる幅広い領域に渡って研究されています。

特別講義では、「人はなぜアッハッハハ」と笑うのか、そして動物はなぜ笑わないのかという話題から始まり、呼気の断続という生理学的な違いが笑いに関係していることを説明されました。たくさんのお話が展開し、人間だけが持つ笑いが免疫力を高めることや笑い気分、快感、との関係から癌や病気を軽くし、さらに長寿とも関係するという驚くべき「笑いの力」を説明されました。

私たち人間しか持っていない“笑い”。大切にしなければ。

著書：「笑いのちから」家の光社、「人はなぜ笑うのか」講談社、等

金庸権教授を招いて

理学療法学科長 佐藤 秀紀

理学療法学科特別講義は、講師に国際交流校である、仁済大学校物理治療学科、金庸権（キムヨンクォン）教授を招いて、7月1日に行いました。

金庸権教授は、釜山白（パッ）病院物理治療室長を兼務しています。また、韓国地域社会健康管理協会会長、大韓家庭訪問物理治療学会会長など、学会においてもご活躍中です。

講義の内容は、韓国医療の現状というテーマで、特に家庭訪問事業を中心にお話しいただきました。

「家庭訪問事業」については、その概念、必要性、期待効果、家庭訪問事業の現状、家庭訪問事業の活性化計画など、ご紹介していただきました。韓国の家庭訪問事業は、まだ始まったばかりであり、質の高い水準のサービスを提供するためにも、理学療法士、訪問看護師の役割が大きいとのまとめでした。今後も仁済大学校との学術情報の積極的な交流と、教員同士の交流が不可欠であると思います。



平成16年度特別講義について

社会福祉学科長 入江 良平

○日時 平成16年11月15日(月) 6限

○場所 A棟大講義室A2

○講師 有限会社竹洞介護あしすと 竹洞孝義氏

○テーマ 「下北から独立型社会福祉士の挑戦」

竹洞氏は、全国でもまだ少ない「独立型社会福祉士」として自ら事務所を開設し、下北郡東通村を拠点に相談援助活動を行っている方です。

講義では「独立型社会福祉士」の紹介や全国的な動向をはじめ、竹洞氏が「独立型社会福祉士」というかたちで活動をはじめたに至った経緯、現在の活動の様子などをわかりやすくお話いただきました。竹洞氏の実践の様子からは、社会福祉士としての新しいかたちの活動であるがゆえの困難さや、既存の組織や機関から独立しているからこそできる実践があるというやりがいについてうかがうことができました。

参加者にとっては、青森県内で先進的な活動をしている社会福祉専門職の方のお話をうかがうことで、青森県内の福祉現場の現状に触れることのできる大変よい機会となりました。

平成16年度特別講義について

人間総合科学科目主任教授 松江 一

人間総合科目の特別講義をされた佐藤初女先生は、その幅広い活動から、「一度本学に呼んで欲しい」との要望が多く寄せられていた。先生は、弘前市で永年「森のイスキヤ」を主宰され、心病む人々に憩いの場を提供、その活動が認められ数々の賞を受賞する等、その活躍は国際的である。そのような多忙の中、明日を担う若い本学学生のために、「21世紀を生きるあなたへ」と題して講義された。先生は83才の高齢にも係らず、50分の講演それに続く学生からの活発な質疑に、ウィットと示唆に富む丁寧な受け答えをなされ、学生はじめ出席者に強い感動と生きることへの示唆を与えた。

講演内容は、「森のイスキヤ」の活動がどのようなものであるか、そこを訪れた心病む人々が心を開き、生きる元気を取り戻す過程で、人の話を良く聞き、その人を受け入れることの大切さ、それに心を込めて作った食を一緒に食べることの大切さを述べた。また、先生自身が特別与えるものが無いので、自己の時間を提供しているとのこと、その際のモットーにしていることは「将来のことも大事であるが、今与えられたこの時を如何に一生懸命生きるか」であるという。最後に「成長する若い君たちは多めに悩み揺れてもいい」、「最後に希望を持ち自己が納得して行動せよ」、その積み重ねが「自分らしさ」や「芯のある土台のしっかりした人間形成」に繋がるといったものであった。

[公開講座]

本学公開講座委員会では、平成11年度の開学以来、毎年計4回の公開講座を実施しています。

今年度も「生活と健康」を基本テーマに、以下のとおり実施しました。

4回で延べ992名(1回平均：248名)の方が受講され、このうち、4回中3回以上受講された57名の方(本学学生を除く)に修了証を交付しました。

《第1回目 5月22日(土曜日)》

①「歴史に学ぶ健康と障害」

講師：伊藤 日出男(理学療法学科教授)

②「世界の子産み・子育て 戦後の日本社会が失ったものは何か？」

講師：大関 信子(看護学科教授)

《第2回目 6月5日(土曜日)》

①「安静の功罪ー病気やケガで寝たきりにならないためにー」

講師：石鍋 圭子(看護学科教授)

②「私達の中にある「アイヒマン」～支配と服従の倫理的考察～」

講師：羽入 辰郎(人間総合科学科目教授)

《第3回目 6月26日(土曜日)》

①「日本国憲法第25条と戦後の医療改革」

講師：ライダー 島崎 玲子(看護学科教授)

②「バランス良い身体組成とは～自分の身体組成について考える～」

講師：李 相潤(理学療法学科助手)

《第4回目 7月10日(土曜日)》

①「スロー・ライフのすすめ」

講師：山内 修(社会福祉学科助教授)

②「楽に生きよう！選択理論」

講師：坂江 千寿子(看護学科講師)



第1回目：大関教授(看護学科)

児童保健委員会(佃小学校)の訪問に対する指導について

運動と生活習慣病の関わりについてのお話

理学療法学科助教授 山下 弘二

佃小学校の児童保健委員会から「運動と生活習慣病の関わり」について具体的に聞きたいということで、6年生女子4名と5年生女子3名、引率の先生2名が来校した。私のような怖そうなおじさんだけでは、緊張するのではないかと当学科の若い女性の松谷助手と2人で対応した。生徒からは「小学生にはどんな運動がいいのか」、「マラソンはなぜよいか」、「どのくらい運動したらよいか」など活発な質問があった。最近、小学生でも肥満などの生活習慣病が増えているということで、生徒に生活習慣測定器(歩数計)を付けさせ体を動かさせたり、身体組成測定器を用いて生徒の体脂肪率、肥満度、筋肉率などを計り、運動と体の組成の変化などについて説明した。小学生には難しかったかもしれない。

出前しま～す(出張講義の状況)

保健大学では高等学校からの出張講義の要請に応え、教員の派遣を行っています。今年度の出張講義は延べ17件。保健医療福祉の分野に関心を持ち、さらには保健大学を目指す生徒が増えてくれることを願っています。

■平成16年度出張講義一覧

月日	高校名	担当教員
6/8	青森戸山	看護：島崎教授
6/10	青森東	理学：川口助教授
7/29	弘前南	看護：山本教授 理学：三浦講師 社福：増山助教授
8/3	八戸北	看護：坂江講師
8/24	五所川原	看護：中村(由)教授
9/24	函館北(北海道)	看護：吉川講師
9/27	青森南	理学：勘林講師 社福：増山助教授
10/9	青森北	看護：鳴井講師
11/5	青森東	看護：大関教授
11/9	田名部	看護：吹田講師 理学：山下助教授
1/25(予定)	青森戸山	看護：藤田講師 理学：桜木講師 社福：山内助教授

延べ11校、17名

大学施設の活用状況

本学では、学内施設を有効に活用していただくため、授業や研究・サークル活動に支障のない場合に限り、講堂・体育館・講義室などを一般に開放しています。

各施設は、主に次の方々に利用されています。

- 講堂／青森県臨床工学技士会
- 体育館／青森県びんぴんすこやか事業（県高齢福祉保健課）など
- 講義室／消防試験研究センター・青森県町村会など
- グラウンド／青森市立佃中学校・青森県立東高等学校など
- 陸上競技場／青森市立戸山中学校・青森県立東高等学校など
- テニスコート／青森市医師会テニス同好会・本学教職員など
- 交流センター／青森県学校給食会
- 実習室／青森県立盲学校など

簡易宿泊施設

〈通称「ドミトリ」について〉

本学では、本学実施の授業・事業等に参加するなどのため、やむを得ず宿泊を要する方のために、旧青森県立高等看護学院学生棟の2階部分を改修し、本年6月に簡易宿泊施設（通称「ドミトリ」）を開設いたしました。その概要は下記のとおりです。

1 利用できる方

下記に該当する方で、遠隔地から来学する等の理由で宿泊を要する者

- (1) 本学の非常勤講師、招聘教授、共同研究者等
- (2) 本学が実施する研修会、講習会等を受講する者
- (3) 大学交流等に係る教員、学生、院生等
- (4) 宿泊待機が必要な実習時等に適切な宿泊施設が確保できない学生、院生等
- (5) その他本学の授業や事業に関係のある方で、学長が適当と認める者

2 施設概要

場所：青森県立保健大学福利厚生棟2階

宿泊室数：17室（1室1人定員）

宿泊室面積：16.2㎡

宿泊室設備：ベッド、机、イス、FF式ストーブ

その他共同利用の設備

- ・談話室（テレビ、テーブル、ソファー）
- ・洗濯乾燥室（全自動洗濯乾燥機）
- ・洗面所（冷蔵庫、電子レンジ、簡易電磁調理器）
- ・トイレ
- ・簡易浴室

3 利用経費

- (1) 利用料 1人1室1泊につき500円
- (2) シーツ等クリーニング代 1回につき420円

4 その他

- (1) 所定の申込書により、原則として利用日の7日前までに申込みが必要です。
- (2) 飲酒・喫煙は禁止となっています。
- (3) 門限は、原則として午後10時となっています。

見 てみて! 保健大学

保健大学には、進学をめざす高校生のみならずをはじめ、毎年たくさんの団体が見学にきています。快適な教育環境、充実した設備は見学者に好評です。

■平成16年度の大学見学団体一覧（H16.11月現在）

【高校生】

木造高校(2回、計61名)、百石高校(39名)、大湊高校(37名)、野辺地高校(40名)、田名部高校(27名)、青森戸山高校(100名)、黒石高校(41名)、大畑高校(55名)、秋田県立十和田高校(70名)、秋田県立花輪高校(24名)、むつ工業高校(19名)

【高校生保護者】

弘前学院聖愛高校(20名)、青森南高校(30名)

【その他】

浜館小学校(15名)、藤崎中学校(11名)、五所川原第三中学校(13名)、荒川中学校(36名)、八戸工業大学教員(3名)
合計 延べ19団体、641名

情報システムの更新について

本学情報システムの各機器等は、大半が開学に合わせて整備したのですが、導入後5年以上経過し、精密機器であるコンピュータ等が正常に動作しなくなる危険性が非常に高いこと、耐用年数の経過、部品の供給停止に伴う保守サービスの終了やOSのメーカーサポートの終了等により、障害発生時の復旧が不可能になることが懸念されること、機器の老朽化、情報化の進展や情報技術の進歩に伴いネットワーク機器やサーバ機器に非常に高い負荷がかかりトラブルの要因にもなっていること、などにより、今年度から順次更新を行っています。

この9月には、情報システムのうちシステム全体を制御するサーバとネットワーク関係の機器を更新しました。

更新に当たり、システムの一部停止等でご不便をおかけしました。ご協力に感謝いたします。

また今回の更新に伴い、これまで何かと不具合が多かったグループウェアシステムを切替え、新しい電子メールシステムとグループウェアシステムを採用しました。利用される方の使いやすさを重視したシステムを構築したつもりですが、操作に慣れるまでは何かと戸惑うことも多いと思います。マニュアル等も参照しながら、とにかくたくさん使っていただき、早く操作に慣れていただければと思います。

今後は次回の更新に向け検討を進めていくこととなります。限られた予算の中で管理面や障害時の対応を含め、より安定し、使いやすいシステムを常に目指しています。ご意見、ご要望があればお寄せください。

最後に学生の皆さんへ。この先社会に出ますと、いわゆる「IT」からは逃れられません。情報システムの利用を通じ、知識と技術に加え、社会の中でのルールとモラルについてもいろいろ考えていただきたいと思います。本学のシステムが全てではありませんが、皆さんの今後の人生に少しでもお役に立てれば幸いです。

人事異動のお知らせ

<新任紹介>



社会福祉学科 講師 (H16.10.1付)
三橋 真人 (ミツハシ マヒト)

はじめまして。生まれも育ちも千葉の私が、列車に乗って青森に降り立ちました。さて、この地でどんなドラマが展開されるのか。ワクワク、ドキドキです。出会いを大切に、たくさんのことを学んでいきたいです。



理学療法学科 助手 (H16.12.1付)
小田桐 愛 (オダギリ アイ)

皆さんこんにちは。私は弘前市出身で理学療法士になってから約9年になります。今まで一般病院で働いてきました。教育という未知の世界に不安がありますが、精一杯頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

<退職>

(H16.11.30付)

佐藤 正昭 (人間総合科学科目教授)

[大学院修士課程(二次)、博士後期課程] 平成17年度入学者選抜試験のお知らせ

青森県立保健大学では、大学院（修士課程(二次募集)、博士後期課程）の平成17年度入学者を募集しています。詳しくは、大学院の「募集要項」をご覧ください。

連絡先/教務学生課入試担当 TEL017-765-2144 FAX017-765-2188 E-mail nyushi@auhw.ac.jp

●大学院（健康科学研究科修士課程二次募集）

募集人員	健康科学専攻…………… 約10名 地域保健福祉学分野、理学療法学分野 生活健康科学分野、看護学分野
出願期間	平成17年1月24日(月)～1月28日(金)
選抜試験	平成17年2月11日(金)
合格発表	平成17年2月18日(金)

●大学院（健康科学研究科博士後期課程）

募集人員	健康科学専攻…………… 約4名 地域保健福祉学分野、理学療法学分野 生活健康科学分野、看護学分野
出願期間	平成17年1月24日(月)～1月28日(金)
選抜試験	平成17年2月11日(金)
合格発表	平成17年2月18日(金)

編集後記

《活彩！保健大学だより》第11号をお届けします。今年には過去最多の台風上陸、また新潟県中越地震により、多くの被害をもたらされた年でもありました。さて、学部の第三期生は就職、進学、国家試験などの課題に取り組み、また大学院修士課程の第一期生は修士論文の作成、大学院で学んだ専門的知識を得て各分野の専門家として新たな出発の準備をしていることと思います。大学としては、平成17年4月開設予定である大学院博士課程の準備、さらには健康科学教育センターに開設される救急看護認定看護師、認定看護管理者セカンドレベルの2つの新しい教育課程の準備など、保健医療福祉の向上に寄与する専門職者の育成の場としての発展を目指し準備しているところです。本号では、学生の食生活状況、卒業生の就職後の状

況、来年度開設予定である博士課程の紹介、今年度で定年退官される先生方からなどの記事を掲載いたしました。今後も皆様からの忌憚のないご意見をいただき、より良いものにしていきたいと考えております。また、記事として取り上げてほしい情報がありましたら、是非広報委員会にお知らせ下さるようお願いいたします。最後に、忙しい中、原稿を担当していただいた方々には深く感謝申し上げます。(広報委員/鳴井ひろみ)

- ◎ 広報委員会委員：勘林秀行、赤坂和雄、吹田夕起子、鳴井ひろみ、吉川公章、小関公英
- ◎ 記録専門部会：工藤乃理子、高橋佳子、八戸宏、李相潤
- ◎ 広報担当事務局：其田工、藤井幸子



青森県立保健大学

〒030-8505 青森市浜館字間瀬58-1 TEL017-765-2000(代表)

編集・発行/青森県立保健大学広報委員会

大学ホームページ <http://www.auhw.ac.jp/>
(バックナンバーもご覧になれます。)